

優秀賞

生きる使命

福岡県 福岡県立筑紫高等学校一年 松尾 風花

桜の花びらが舞う春爛漫の朝。母の叫びで目が覚めた。入学式の三日前、父が急逝した。救急車のサイレンが鳴り響く中、救急隊に告げられたことを私は信じる事ができなかった。強い喪失感に襲われ、心臓が高鳴った。深夜に、父と交わした最後の会話を思い出すと、後悔の涙が溢れ続けた。警察官が捜査するリビングは、非日常的だった。あの時自分が気づいていたら、そんな後悔が自分を苦しめた。夜が明けても眠れず涙が止まらなかった。人生で初めて深い悲しみを感じた。日々当たり前の存在だった父を失い、今生きていることの尊さを痛感した。家族が健康に暮らして、他愛のない会話をする。そんな幸せな日常が続くことは奇跡だということに気付かされた。反抗期真っ只中だった私は、父とあまり会話を交わしていなかった。だから、一度でいいから会って話したい。あと一度会いたい。ただその感情しかなかった。

入学式前日、父に見せることが出来なかった新しい制服を着て葬儀に参列した。線香の匂いが漂う葬式場でたくさん流した涙は父にとどいてると信じていた。大勢

の人が参列し、一人一人が流す涙を見て、二度と会えないということに改めて痛感した。心が苦しかった。幼少期のかけがえのない思い出が蘇る。十五年間という短い期間、父が尽くしてくれたことを失ってから実感した。いつも厳しかった父は不器用なりに時に優しく家族を支えてくれた。最後に父を助けることが出来なかったことを強く後悔し、謝り続けた三日間。感謝を伝えることができなかった。ご飯を食べていても、寝ていても、溢れる涙は心を締めつけた。しかし、「お父さんは、そんな事を望んでいない」という姉の言葉に気づかされた。十五年間叱って、支えて、育ててくれた感謝を心から伝え、見送ることができた。

そんな私は、次の日から高校生活を迎えた。親と行けず、友達もいなかった入学式は心細かった。だから、友達と写真を撮り笑顔で話す周囲の人はとても輝いて見えた。想像とかけはなれた高校生活は慣れず、ただ闇雲に日々を過ごしていた。きつとどこかでまた会えるだろう、と思っていた私は、父が亡くなったことを実感できずにいた。そんな中、担任の先生に支えていただいたおかげ

で、少しずつ学校生活に慣れることができた。その時は視野が広がり、世界が変わったように感じた。

私は、この経験を通して、生命について考えた。今までの私は、何気ない日々を普通に生きていた。そんな日々は、とても貴重な人生の時間だということに気づかされた。友達と笑い合い他愛のない会話をする。そんな幸せは、奇跡だと思う。また、勉強や部活動で高みを目指し人生を豊かにしている。何気なく経験していることは、当たり前ではなく、生きている人にしかできない特権だ。やりたいことができなかった人や、やり残したことがある人など、様々な思いを抱えた人がたくさんいる。そんな人たちの分も一生懸命に生きる使命があると思う。だから私は、日々目標を持ち、そこに向かって一生懸命に努力することを大切に生きていきたい。人間は、生きていくだけで無限大の可能性があり、より高みを目指して人生を豊かにすることが、人間の使命だと思う。今は毎日幸せに過ごし、充実した日々を送っている。そんな日々を当たり前と思わず大切に過ごし、恩返しすることのできなかった父の分まで一生懸命に生きていく。

